
或る犬の生涯

山田 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る犬の生涯

【Nコード】

N9468X

【作者名】

山田 潤

【あらすじ】

或る家庭犬の生涯です。犬の視点で書いてみました。ペットの幸福とは一体何なのか、彼等の目に人間の行いはどう映っているのか、殆ど筆者の思い入れの物語です。

犬、かくも語りき

初めに断っておきますが、これは僕があなた方人間のいうところの五歳の意識で書いています。

幼少期に確たる自我もなければ、あなた方人間に意志を伝える術さえ持っていなかったのですから。

従って、おぼろげな記憶を辿ったものであったり、主人の思い入れによる記述になったりもします。

文体が堅いのは、これまた人間がいうところの文系の主人に仕えたことによるものです。アップロードも当然主人に依存しています。僕がキーボードを扱えば良いのですが、この前足の形状ではとても無理です。主人の肉体を借りて書きあげて行こうと思います。

まずは自己紹介を。僕はゴールデンレトリバーという食肉目イヌ科の哺乳類です。血統書に記された本名はアンディ・スカイハイ・JH・JPと長ったらしいのですが、主人は僕をイッポと名付けて呼んでいました。そして、冒頭に述べた五歳などといった年齢を認識するものではありません。暗い時間と明るい時間を千二百回ほど過ごしてはいますが。

だから、犬の年齢は人間の幾つに相当するなどといった乱暴な換算は無意味であるご理解下さい。そしてストーリーに過度の期待をもたれることなどないよう、お願いします。大きな変化のない暮らしをこよなく愛する僕達です。散歩に連れ出してもらう、友人（勿論、犬です）と遊ぶ、食事をする（餌と呼ばれる類の物ではないものを主人は供してくれました）、排尿、排便をする。ストレス解消のために走り回る。そんな日常を書いた所で、お読みいただくあなた方の興味をそることなどないであろうと思うのです。

また、誤字・脱字、稚拙な文章、さらには整合性の不一致についても、予めお詫びしておきます。ですがそれは僕のせいではなく、

代筆をする主人の能力が及ばなかったのだ、と言いつつ添えて。

僕が産まれたのは愛知県春日井市というところにある動物病院です。母はサクラと呼ばれていました。母の御主人は医療関係にお勤めになる大町さんという温和な人でした。明るい奥さんと元気なお子さん達、猫も数匹一緒に暮らしていました。

そもそも母が僕達を産むことになったのは、人に譲るためだったと聞いてます。無体な話です。父親の名前も血統書には書いてありましたが、見たこともなければ育ててもらった恩義もないので省略します。

六頭兄弟で唯一オスであつた僕は、岐阜というところに住んでいた主人にもらわれて行くことになりました。偶然ですが、その主人の名前も母と同じ、佐倉^{さくら}でした。彼は書物で　メスの方が飼いやすい　と、いった情報を仕入れ、妹か姉を譲り受けるつもりだったらしいのですが、大町氏の『オスは尻尾をピンと立てて歩くんです、格好いいですよ』との言葉に、心変わりをされたようでした。ただ後に述べる理由で僕は尻尾を上げることなく歩き、主人を落胆させました。

余談ですが、佐倉氏はよく言つたものです。『愛情を伴わない性行為は無意味だ』と。だとすれば僕の出生は無意味なものだということになります。しかし世の多くの犬がこんな風に産まれてくるのです。人間の価値観で計られても困るというものです。

言い忘れましたが、僕は世間一般のゴールデン・レトリバーと呼ばれる連中に比べてかなり色白です。正確には体毛が白いのですが。そして友人だったジョンも僕同様に白かったように記憶しています。父親がイギリス系だからという理由でしたが、本当の所はよく分かりません。

夜目にも所在が分かりやすい以外は、あまり嬉しいことはありませんでした。汚れが目立ち、その都度あまり好きではないシャワーを浴びせられたのですから。人間にとってよい香りのシャンプー

ーであつても僕達には迷惑でしかありません。犬のアイデンティティはそれぞれ特有の匂いによるものなのですから。人間であるあなた方には理解出来ないかも知ませんが、僕達が初対面の相手と肛門付近（臭腺）を嗅ぎ合うのは、それが理由なのです。

僕達、犬の視力及び視覚的認識力というものは、あなた方人間のそれに及びません。そのため、優れた嗅覚と聴覚で五感を補つていきます。僕がシャンプーされた途端に体に泥や埃を纏おうとしたのは、アイデンティティの崩壊を恐れた、言うなれば自己防衛本能に基づく行為だったのです。佐倉氏は『せっかく、キレイにしてやったのに』と嘆いたものですが、本能なのですから仕方ありません。

人間である、あなた方の世界でもよく聞きますよね。【自分探し】という言葉。よく言えば感受性が豊かなのでしょね。ですが悪く言えば被害者意識が強すぎる。或いは自己への過大評価が原因なのではないですか？ 機会があれば、ご自身を見つめ直してみられるといいでしょう。

幸い、我々犬はあなた方ほど頻繁に自分自身を見失うことはありません。

古の文豪の小説に、猫が語る手法をとられたものがあつたと聞きますが、それを真似た訳ではありません。佐倉氏の友人の勧めでこつなつたのです。退屈しのぎになれば、と思つて書いておりますが退屈を助長させてしまう恐れもあります。繰り返し言っておきましょう。

犬の語る物語などに過度の期待はしないで下さい。

媚びる犬

佐倉氏の家に連れてこられて僕は車という鉄の塊の下に潜り込んでしまいました。初めての場所で、初めての人々に囲まれた訳です。恥ずかしさのあまり車の下に潜り込んだことは説明するまでもないでしょう。

成長するに連れ、誰にでもすり寄って行く図々しさを発揮するようになる僕でしたが、幼い頃には、こんな奥ゆかしさもあったのです。そして、それはあなた方人間も同じですよ。

犬の僕達にも、あなた方ほど発達したものではありませんが、前頭連合野が備わっています。つまり、感情はある訳です。ただ、訓練によって、またそれぞれの努力によって十分な発達がなされていないと、時に本能が感情を置き去りにしてしまいます。

人間にも、そんな方々をよく見かけますよね。主人の佐倉氏など、その典型だったと思われます。彼等の暮らす社会では一人のオスに一人の女性が連れ添うのがルールだそうですが、彼の生存本能、或いは生殖本能というべきでしょうか。とにかく彼のそれはルールに従ってなかったように見えました。

「俺は直情径行型だから」と、僕に自嘲気味に語ったことも少なくありません。そして今なおこの世に迎え入れてやることの出来なかった魂に詫び続けておられます。それほど後悔するなら、短絡的に行動を起こす前に塾考すべきでしょうに。何度もその旨を告げたのですが、僕のアドバイスは終ぞ聞き入れられることはありませんでした。

そして、そんな佐倉氏を舌鋒鋭く非難する社会の”自称常識人”が、それぞれのペットには何頭（小型犬は匹と数えるのかも知れない）もの異性との性交を強要するのです。優れた遺伝子を後世に残

そうとするのが目的だといわれますが、僕には納得がいきません。それを金銭で売買しているのですから。

「古来は人類もそうだったんだぞ。もっとも、俺の遺伝子が優れているかどうかは分かんがな」と、その件に触れる毎、そういつて佐倉氏は自己弁護をしたものです。彼はこちら側の世界に住むベキオスだったのでしょね。そうすれば多くの非難を浴びることもなく、あまつさえ賞賛さえ得られたに違いありません。そう考えると同情の念を禁じ得ません。

媚びる 人間にとっては良い意味を持たない言葉だそうですが、僕達にとっては極めて重要な意味を持ちます。生存本能に基づいた振舞いであるといっても過言ではないでしょう。

あなた方人間によって野生を奪われた僕達は、同時に生きるための狩りをする能力を奪われてしまっている。従ってあなた方から与えられる食料が命綱なのです。そのためなら媚びもしましょよ。尻尾も振るとい言葉、あなた方はよく比喻や暗喩に使っておられますね。僕達をそうさせたという自覚を持っていたければ幸いです。

𪛗という大義を振りかざし、いうことを聞かないとあげない。オアズケ、待てなど、様々な方法で、その生存本能を抑制しようとなさいますね。本能を抑制出来なければ、僕達をペット＝家族として受け入れてはあげない、そう言っておられるのでしょうか。

酷い話を聞いた事があります。猟犬として飼われていた犬が、狩猟シーズン終了と同時に、そのまま山に置き去りにされるそうです。翌年にまた訓練された犬を買う方が安上がりだと言う理由で。

あなた方に捨てられ、努力して本来の野生を取り戻した彼等は、野犬と呼ばれます。そして、そんな事情があっても、危険であるという理由で駆除の対象となってしまうです。二重拘束を押しつけたあなた方の手によって。

人間のオス諸兄にお訊ねします。眼前に全裸の眉目麗しい女性が居て、おいでおいでをされたらどうなされますか？ あなた方の本能への訴えです。人目さえなければ倫理観などひとたまりもなく吹き飛んでしまうのではありませんか？ オアズケはその女性との間に分厚いガラスを張られたようなものです。とても、残酷な行為だと思います。

宦官になった犬

さて、僕が生後半年ほど経ったときの出来事です。『主人への忠誠心の構築と攻撃性の抑制には去勢が有効だ』佐倉氏が図書館で借り出した書籍に掲載されていたその記事のお陰で、僕に厄災が降りかかることになります。

外科手術シーンの描写は語るも涙の物語なので省略しますが、つまり僕は神（主人）に仕える奴隷「宦官」となった訳です。当時の僕に発達した性欲がなかったのが救いでした。後に佐倉氏の意識をお借りして味わった性的絶頂感たるものを知っていたならば、彼への忠誠心は保てなかったでしょうから。

しかし既に失われてしまったものを返せなどといった無理は言いません。人間の女性はそれをよく口にされるそうですね。しかし僕達犬は非常に寛大なのです。

そんな情報がペット関連の書籍やインターネットなどにも多く流布され、まことしやかに語られてはいますが、所詮はあなた方人間の視点からの理解に過ぎません。若しくは統計といった数字の横暴でしょう。言語を分かち合わない我々ペットとあなた方人間との間に、完璧な意志の疎通が計れるはずはないのですから。それは例えば動物学者と呼ばれる自称識者様方においても同様なのです。

この主張は、この物語が終わるまで何度口にすると思います。メインテーマだといってもよいでしょう。また同じ種だからといって我々の全てを十羽一絡げに扱って欲しくはありません。そもそも我々は犬なのです。羽はないでしょう。せめて頭、それが気に入らなければ匹と数えて欲しいものです。

つい興奮してしまいました。

生存本能の一つである性欲を奪われた僕の欲望は大半が食欲に向かってしまうことになります。僕達の食生活について一言言わせて下さい。

『大切なペットの健康のために栄養バランスの取れた食事を』メーカーのコマーシャルシヤリズムに乗せられたあなた方が僕達に与えてくれるものは、殆どがドッグフードですよ。あの鼻を突く匂い……正直、嗅覚の発達した僕等には苦行ともいえる食事の時間となっているのです。しかし、それ以外に何も与えてもらえない以上、生きるために食べねばなりません。ドライフードにおいてはもはや、排泄物の始末を第一に考えたものと思えません。あの色、形状……明らかにウサギか鹿の糞ではないですか。それを来る日も来る日も口にしなければならぬ僕等の窮状を知って欲しいのです。

あなた方人間の食生活に置き換えてみて下さい。同様のことを佐倉氏が別のブログに書いておられました。いくら好物でも三百六十五日三食（僕等は成長すると二食にされました。力士じゃないんですから）同じ物を食べる人が居ますか？ 例えばカレーライス。三日三晩食べ続けてごらん下さい。大抵の人は肌が黄色くなったような錯覚に陥ることでしょう。

体に良くないと分かっているても美食を追求される方々。百害あって一理ナシを認識したうえで、タバコを止めない人々が居られますよね。あなた方が手にされた選択の自由を、僕達にも分け与えて下さい。週に一日で構いませんから。

その点において僕の主人である佐倉氏は理解がありました。彼はイッポ鍋と名付けたポトフ様なものを毎朝毎晩作ってくれたのです。肉、穀物、野菜を煮こみ、味がなければ寂しいだろうと、ニンニクやコンソメで味付けまでしてくれていました。恐らくこんなことを書けば、彼は愛犬家の皆さんからお叱りを受けることでしょう。それでも彼は止めません。「不味いものを食って長生きするぐらいなら美味しい物をたらふく食って早死にした方がいい。美味しい食事は人を笑顔にするんだ」そんな主義を標榜されていたのですから。

気まぐれで独善的な佐倉氏ではありましたが、僕の事は大切にしてくれていました。変な言い方になりますが、生活の半分ぐらいは犬扱いされていなかったように思えます。

おっと、褒めすぎました。彼の発情期（恋愛に関する様々な行為をしている期間）には放つたらかしにされていたことを思い出しました。本来、去勢が必要だったのは彼だったのかも知れません。

吃音の犬

僕は無口です。僕の咆哮（あなた方が犬の泣き声「ワンである」と解釈されるそれ）は、主人である佐倉氏をして年に二、三度しか耳にしないはずです。

明かしたくない事実ではありますが、これを知ってもらわないと僕の人となり（犬となりといった方が正確かも知れません）を分かっていただけないと思います。あなた方に武士の情けというものがありなら、くれぐれも他言無用にてお願いします。

実は僕は犬に珍しい吃音だったのです。勿論、僕自身がそう認識していた訳ではありません。よそのご主人様が「うるさいっ」と、いつも吼え続ける友人達を真似てみようとした時、上手く発声できないことに気がきました。そしてそんな僕を指差し（前足で）笑う友人達のせいで、僕は段々寡黙になっていったのです。

ところが、人間の評価というものはおかしなもので、そんな僕を大人しく抑制の効いた犬のだと判断されました。ここでも、あなた方人間の犬に対する解釈は間違っていたのです。

或る日、僕がたどたどしく声を上げた希有な機会を耳にし、佐倉氏は「お前は吃音だったのか」と、呆れたように言いました。これはパワーハラスメントになるのでしょうか。彼に悪気はなかったようなので許してあげましょう。とにかく彼のその言葉によって僕は自分が吃音であると理解しました。甘える時、嘆く時のクンクンは発声器官に無理を強いることなく鼻先を鳴らすため上手く出来ていたと思います。短く言葉を切らない遠吠えも、消防車のサイレンに呼応して練習したので、まあまあこなせます。

その僕が吠えた記憶です。自分より大きな四足歩行の動物（後に、牛とか馬とかいう種だと知らされました）に怯えて数回（誓ってもよいですが、僕の生涯において五回は越えていないはずです）。そ

して、あなた方の目に映らない、いわゆるスピリチュアルなものへの畏敬の念で数回、だっと思ったと思います。我々があらぬ方向に向かつて吠え、さらには毛を逆立てていたとしたら、その時はあなた方の見えない何かが、そこに居るのです。佐倉氏は、何となくそれを理解していたようでした。

同族に吠えたことが一度だけあります。広い公園を走り回っていた僕と友人達を、鎖に繋がれて羨ましげに見つめる赤い毛並の犬に「君は放してもらえないのか？」と、近づいて訊ねる僕の鼻先を、彼はいきなり噛んだのです。温厚で鳴らす僕だったのですが、その無礼さには怒りのウオン（中国の通貨ではありません。声の低い僕の精一杯のワンです）で応えたものでした。

この章の要旨は、あなた方人間の、僕達に対する理解の浅さです。「犬ごときが不遜な」と、申されても事実なのですから仕方ありません。

もの思いに耽る犬

この国はどうなってしまうのでしょうか。被災地では頻発する余震に脅えながら未だに不便な避難所生活をおくられる方々がおられるというのに、統一地方選ですか——お祭り騒ぎをしていられる状況なのでしょうか。そして、こんな時期であろうと彼等の演説は他政党のこきおろしに終始されていましたね、哀しいことです。あの中のどなたが知事に、或いはどの政党が議会を占めようと民の暮らしが良くなることなどないのでしょうか。某県の知事に当選された方は、万歳三唱しておられました。過剰な自粛は宜しくないのでしょうか、アレはいかなものかと。

彼のマニフェストに防災に対する見直しはありましたが、被災された方々への配慮はなかったのでしょうか。自民推薦でしたね。原発推進派なのでしょうか。

『必要悪』 少なくとも、小さなお子さんには聞かせたくない言葉です。北関東から東北の海の中は、環境保護団体が知ったら大騒ぎになりそうな状況だと聞きます。

いや、犬の僕が知っているのですから彼等なら既に知っておられるでしょう。それでも騒動が起きないのは我が国への思いやりか、はたまた彼等にとって環境保護も政治の手段でしかないからでしょうか。

G・P・さんの船も寄り付こうとしないほど恐れておられるのは余震でしょうか？ 或いは原発でしょうか？

保安院のスポークスマンの方は、経産省で無類のクレーム処理能力をお持ちの方だと聞いてます。しかし原発に対する造詣はどうなのでしょう。彼の髪型どうこうより、僕にはそちらの方が気になって仕方ありません。悪の権化の如く叩かれている東電の皆さんですが、現場で懸命の修復作業を行っておられる人々には頭が下がる思いです。まさに決死隊ですよ。東電社員の身分を隠してボランティア

イアに励まれる方も居られると聞きます。

哀しみから立ち上がるために必要なのは憎悪なのでしょうか？僕にはそうは思えません。

『被害の全容が掴めない』そうでしょうね、あれほどの大惨事なのですから。そして人的被害が把握できたとしても、経済的な打撃についてはどうなのでしょう。全て公開されるのでしょうか。ようやくリーマンショックから立ち直りつつあった我が国の経済に更なる、そして未曾有の不況が襲う心配がひしひしと伝わってきます。僕は余計なことを口にし過ぎですか？ 犬である僕がどれだけ思い悩もうと何も変わることはないのですね。虚しい限りです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9468x/>

或る犬の生涯

2011年10月30日07時09分発行